

女性医師支援のあゆみ

History of
female doctor support

第3章

日本医師会・北海道医師会
の取り組み



1 2006年まで

(1) 日本医師会女性会員懇談会

これまで女性医師の意見を聞く機会が希薄であった日本医師会では、それを密にして女性医師の意見を政策に反映させること等を趣旨として本懇談会（石原幸子座長ほか7名）を設置した。

第1回懇談会は1998年8月6日に開催され、坪井日医会長から特に諮問はなく、フリーな立場で討議するよう要望された。10月31日には、アメリカ医師会のディッキー会長（女性）と本懇談会委員を含めた女性医師との懇談が都内のホテルで開催された。

懇談では日米女性医師の活動、女性医師のおかれている現状等について意見が交わされた。

1999年度は各ブロックから推薦された委員を中心に年5回の懇談会を開催した。北海道からは、斯波憲子日本女医会北海道支部長が参画し、2001年度には、安藤敬子旭川市医師会理事（市立旭川病院）が参画した。

2001年度は、女性会員フォーラムの企画を中心に検討を行い、9月には「今日の医療における女性医師の役割」をメインテーマとして、日本医師会館において女性医師を中心に約200名の参加者で「女性会員フォーラム」が開催された。懇談会では、「日医の組織強化のために」とのテーマを設け、日医医療政策改革構想等について議論を重ね、女性医師の立場から見た日医の各種施策などについて提言をまとめ、日医会長に提出した。

(2) 北海道医師会女性会員懇談会

北海道医師会では、2002年度の基本的活動方針の別掲で掲げた女性会員懇談会を2002年11月23日（土・祝）に開催した。当日は、女性会員から育児支援、産休中の応援医師派遣、研修医の保育所整備、職場の環境整備など多岐にわたる意見・要望を聞いた。女性会員の参加者は17名。

次 第

1. 開 会
2. 会長挨拶
3. 話題提供
 - (1) 仕事と家庭生活の両立に係るアンケート結果について
北海道医師会常任理事 羽田 克己
医業経営・福利厚生部長
 - (2) 女性会員フォーラム（2001年9月8日）について
北海道医師会副会長 赤倉 昌巳
 - (3) 職場における女性勤務医師の実態調査について
北海道医師会常任理事 羽田 克己
医業経営・福利厚生部長
4. 意見交換
5. 閉 会

通算2回目の懇談会は、4年後の2006年1月21日（土）に、女性会員を取り巻く特有の環境に対しその課題を把握し、より望ましい方向へ進めることを目的に女性会員16名の参加を得て開催した。

話題提供

1. 「日本医師会女性会員懇談会」報告
2. 女性医師バンク制度の趣旨と問題点について
意見交換

(3) 北海道医師会女性医師座談会

北海道医師会では、家庭と仕事の両立、出産・子育て、職場環境など女性医師がおかれている諸問題についての意見交換を目的に2006年8月12日（土）に女性医師5名の参加を得て座談会を開催した。

この模様は北海道医報第1058号〔11月1日付〕附録にて会員に紹介した。

座談会のテーマ

1. 保育施設とインフラ整備について
2. 女性医師バンクの問題点と利用促進について
3. 復職時の再研修制度について
4. 女性医師のキャリアアップについて

(4) 日本医師会女性会員懇談会・男女共同参画委員会

日医女性会員懇談会の2004年度、2005年度には、北海道からは藤井美穂日本女医会北海道支部長が参画し、2年度にわたり女性医師にかかわる諸問題について検討を行い、2005年7月30日には、女性会員懇談会の企画による第1回男女共同参画フォーラムを開催した。

なお、本懇談会は2006年度より男女共同参画委員会に改組名称変更を行い、日医会長からの諮問を受け、鋭意検討を重ね答申している。

■開催状況

年度	諮問事項	北海道推薦委員
1998	女性会員懇談会報告書「日本医師会の組織強化に対する女性医師からの提言」	—
1999	女性会員懇談会からの提言	日本女医会 北海道支部長 斯波 憲子
2000	女性会員懇談会報告書	旭川市医師会 理事 安藤 敬子
2004	女性会員懇談会報告書	日本女医会 北海道支部長 藤井 美穂
2006	女性医師の勤務支援についての日本医師会の取り組み	北海道医師会 常任理事 藤井 美穂
2008	女性医師に対する実効ある就業支援策について	同上
2010	日本医師会の男女共同参画への取り組みについて	同上
2012	男女共同参画のさらなる推進のために	同上
2014	輝く女性医師の活躍を実現するための医師会の役割	同上
2016	医師会組織強化と女性医師	岩見沢市立 総合病院 小児科 藤根 美穂
2018	男女共同参画の推進と医師の働き方改革	同上

(5) 日本医師会男女共同参画フォーラム

第1回男女共同参画フォーラムは、2005年7月30日に日本医師会館で開催された。

以後、男女共同参画社会の実現に向けての取り組みを示し、組織強化につなげることを目的に毎年開催地の都道府県医師会が担当となり実施している。

■開催状況

回	開催日	テーマ	担当
1	2005.07.30	女性医師は何を求め、何を求められているか	日医
2	2006.07.29	パネルディスカッション「女性医師バンクに関する諸問題」外	大阪府
3	2007.07.28	医師の勤務環境の改善を目指して	神奈川県
4	2008.07.19	医療崩壊をくいとめるために、今何ができるか、何をすべきか	福岡県
5	2009.07.25	今、医師の働き方を考えるとともに仕事を継続するために—	北海道
6	2010.07.24	男女共同参画のための意識改革	鹿児島県
7	2011.07.30	一育てる・男女共同参画のための意識改革から実践へ—	秋田県
8	2012.07.28	変わる～男女共同参画が啓くワークライフバランス	富山県



第8回男女共同参画フォーラム(2012年7月28日 富山県)

9	2013.06.20	みんながって、みんないい～伝えたい、豊かな医療人をめざすあなたへ～	山口県
---	------------	-----------------------------------	-----

回	開催日	テーマ	担当
10	2014.07.26	医療界における男女共同参画のさらなる推進に向けて～10年で医療界における男女共同参画は進んだのか～	日医
 <p>第10回男女共同参画フォーラム (2014年7月26日) 日医</p>			
11	2015.07.25	共同から協働へ～多様性を生かしたワークシェアリング	徳島県
12	2016.07.30	男女共同参画が医療界にもたらすメリットとそのエビデンス	栃木県
13	2017.07.22	今後10年の医療界で男女共同参画は何をめざすか	愛知県
 <p>第13回男女共同参画フォーラム (2017年7月22日) 愛知県</p>			
14	2018.05.26	次世代がさらに輝ける医療環境をめざして～超高齢社会で若者に期待する～	高知県



第5回男女共同参画フォーラム (2009年7月25日) 北海道

なお、第5回男女共同参画フォーラム (2009年度) は、当会が担当となり次のとおり開催した。

プログラム

- 日 時 2009年7月25日(土) 午後1時
- 場 所 札幌グランドホテル
- 主 催 日本医師会
- 担 当 北海道医師会
- 参加者 252名(うち男性131名、女性121名)

次 第

総合司会 男女共同参画委員会委員 藤井 美穂

1. 開 会
2. 挨 拶 日本医師会会長 唐澤 祥人
北海道医師会会長 長瀬 清
3. 基調講演
「私の50年史:ある心臓外科医の生き方」
テルモ株式会社上席執行役員、テルモハート社
取締役役員長兼CMO 野尻 知里
4. 報 告
 - (1) 日本医師会男女共同参画委員会
—女性医師の勤務環境の現況に関する調査報告—
男女共同参画委員会委員 春木 宥子
 - (2) 日本医師会女性医師支援センター事業
日本医師会女性医師支援センター マネージャー
保坂 シゲリ
5. シンポジウム
今、医師の働き方を考える—ともに仕事を継続するために—
 - (1) 医師の働き方を変える
福岡県医師会男女共同参画部会委員会副委員長
香月 きょう子
 - (2) 医師の働き方を考える
—育児支援中の男性医師の視点を通して—
札幌医科大学耳鼻咽喉科学講座 正木 智之
 - (3) 女性医師に対するキャリア教育
東京女子医科大学医学部長・小児科主任教授・
男女共同参画推進局副局長 大澤 真木子
 - (4) 地域医療連携の中での医師の働き方
札幌医科大学学長 今井 浩三
6. 総合討論
7. 第5回男女共同参画フォーラム宣言採択
8. 次期担当医師会会長挨拶
鹿児島県医師会会長 米盛 學

日本医師会男女共同参画フォーラムから学ぶ

北海道女性医師の会 副会長
北海道医師会
女性医師等支援相談窓口コーディネーター
本間内科医院 院長
澤田 香織 先生



日医男女共同参画フォーラムには、北海道開催の2009年第5回より参加させていただいております。ちょうど2009年から小樽市医師会理事に、2010年から北海道女性医師の会会長となり、どうあるべきか、どう振る舞うべきか、不安でいっぱいでした。

そんな中、第5回北海道フォーラムで初めて見る、全国から集まった多くのリーダーシップを発揮する優秀かつ美しい女性医師たち。そのエネルギーに圧倒されたのを覚えております。基調講演演者はテルモ（株）上席執行役員、テルモハート社取締役会長兼CMO（55才）外科医の野尻知里先生でした。その中でリーダーシップについて

- ①チアリーダーになりきる
- ②パッションとパワーを常に演じる
- ③明確な目標とミッションを提示する
- ④部下と対等に議論する
- ⑤親密を保つ
- ⑥最後の責任は自分で取ると言い切る
- ⑦リーダーは絶対あきらめないことを態度で示す
- ⑧よくやったと常に褒める
- ⑨チームワークの力を常に強調する

と、部下の重すぎる荷物は自ら背負ってでも登り切る決意を伺い、自分の目標を見つけ、心定まることができました。

これらの会議や活動を通じて素晴らしい医学生、研修医、そして指導者の先生方との出会いは、まさしく自分自身の意識を変え、背中をおしていただきました。

特に印象深かったのは、第6回鹿児島での男女共同参画フォーラム実行委員の皆さまと行動をともにしたときでした。前年ため息交じりに眺めていた先生方です。間近で接する女性リーダーたちは限りなくやさしく、ユーモアがあり、自分の意見をはっきり言え、そのパワーを体感し、まさしく自分自身の「意識改革」の年でした。

また第8回富山では前日本医師会常任理事でこの

フォーラムを主導されてきた保坂シゲリ先生より、「わたしは意見を言えるシステムを作っただけ、そしてこれからはそのシステムを守っていくことが重要」と伺い、このフォーラムが数少ない重要な場であると認識いたしました。すべてに共通する言葉です。また富山県医師会は理事16名中4名が女性という、全国5.3%（2012年7月）に比して女性理事比率トップをいく医師会です。彼女たちのシンポジストに対する最後の質問は、「医師を志した動機」「現在医師であって良かったか」でした。決して医師である事を諦めないでキャリアを積んでほしいというメッセージを受け取りました。

第10回東京では、意志決定の場面で女性医師が参画していく重要性についての議論が印象に残りました。男女フィフティフィフティであることが価値ある多様性を生み出す。女性でも多様な考え方があります。さまざまな場面で女性枠を含むさまざまな年代、立場の人が、意志決定できる同じテーブルに座ることが大切であると感じました。

本フォーラムは「働き方を変える」「意識改革」「育てる～実践へ」「変わる ワークライフバランス」「多様性への寛容」「次世代を見据えた医療環境」へとテーマを展開し、女性医師にとどまらず男性をも含む医師全体ととらえ、さらに医療システムへの提言、国民を巻き込むことへの提言、若手医師自身の主体的な参画への提言は現在、北海道では「医師キャリアサポート相談窓口」事業として、少しずつ具現化されてきました。

女性に限らず、すべての医師が初心を忘れることなく、心身共に健康にキャリアを継続していくために、そしてライフイベントは、人生やキャリアをより深めるイベントとして大切にできるためにも、さまざまな視点からの支援が必要です。当然、それぞれの事情や考え方、価値観も異なり、直接当事者の生の声を聴き、きめ細かな運営こそ、このシステムを守っていくことと考えます。

「男女共同参画フォーラム」に参加して

北海道医師会
女性医師等支援相談窓口コーディネーター
旭川赤十字病院 副院長
長谷部 千登美 先生



日本医師会の男女共同参画フォーラムは、2005年に第1回目が開催されて以来、毎年担当都道府県の医師会が企画して全国各地で開催されてきました。北海道医師会が担当になったのは2009年の第5回フォーラムで、7月25日に札幌市で「今、医師の働き方を考える—とともに仕事を継続するために—」というテーマで開催されたという記録があります。

私が旭川市医師会の理事としてこのフォーラムに参加したのは2012年以降です。男女共同参画社会の実現に向けての取り組みを主なテーマとした毎年のフォーラムですが、女性医師の増加が顕著となるにつれ、話題の中心となるテーマも深まってきたように感じます。女性医師に対する育児支援を中心とした話題から、女性医師を育てる立場としての「イクボス」の概念、そしてさらに男女を問わずキャリアアップを目指す方策が話し合われるようになり、そして近年では働き方改革の概念も検討されるようになってきました。

男女共同参画フォーラムが開催されるようになる前は、女性医師はマイノリティと認識されることが多く、出産・育児に伴って休業や廃業をやむなくされる『半人前』のような感覚でとらえられ、女性医師の入局は認めない、あるいは歓迎しないという医局もあったように聞いています。女性医師はどうせやめてしまって、医師不足の解消に貢献できないから、採用すべきではないという考え方がこの頃から根強く広まったのであろうと思われます。このような発想が、昨年明らかになった医学部入試選抜における女性差別問題にもつながってきた可能性があります。若い女性医師のキャリア継続に当たって最も大きな壁は、妊娠・出産・育児期であり、その時期における支援体制として院内保育所や病児・病後児保育などの体制、そして女性医師バンク整備などの運動につながりました。

しかし、女性医師のキャリア継続のためには育児の支援をするだけでは不十分であり、男性医師や上司をも含む職場全体の対応が不可欠となることから、男女共同参画がさらに推進されるようになりま

した。フォーラムでも、ワークライフバランスやワークシェアリング・意識改革といったテーマが多く使われるようになってきました。女性医師の意識改革ばかりではなく、医療に携わる多くのスタッフが、男女共同参画の意識を持ち、多彩な働き方を理解し協力しあえる体制が必要であるという認識が徐々に浸透してきたといえるでしょう。

近年では、医師の働き方改革が広く強調されるようになり、医師不足に対する対策の一つとしても、女性医師の活躍が期待されています。多くの医学部において、女子学生の割合が30%を超える程度まで増加してきている現在、男女にかかわらずすべての医師が各自の果たすべき役割を全うしながら、多様な働き方を許容する協力体制を築き上げることが重要ではないかと思えます。

2019年に仙台で開催された第15回男女共同参画フォーラムで採択された宣言で、『多様な働き方を認め、男女を問わず豊かな医療人を育む』という一節がありました。今後の医療体制を確かなものにしていくに当たり、男女共同参画がさらなるステージに向かう大きな課題であると全国の参加者が賛同したものです。このような動きを止めることなく、男女共同参画社会をさらに確固たるものにしていきたいと、強く願っています。

2 2006年から2011年

(1) 医師再就業支援事業 (女性医師バンク)

日本医師会では、2006年11月22日付、厚生労働省と「医師再就業支援事業委託契約」を締結し、2006年9月29日付で厚生労働大臣に対して「有料職業紹介事業の許可申請」を行い、東京労働局による実地調査ならびに厚生労働大臣の諮問機関である労働政策審議会の審査を経て、12月1日に許可を取得、2007年1月30日に「日本医師会女性医師バンク」を開設した。

また、長期離職医師の再研修の支援として研修実施施設に対する研修の実施依頼や研修に関する受け入れ施設、プログラムの紹介を行い、研修を希望する登録者に対し、就業決定前に行う研修の受け入れ先として、個々の事情や居住地、専門科に合わせて全国の各大学附属病院等に個別に受け入れをお願いしている。

(2) 女子医学生、研修医等を サポートするための会

日医男女共同参画委員会が、支援活動として、女子医学生・研修医等を対象に都道府県医師会と共催で2006・2007年度まで実施してきた「女子医学生、研修医等をサポートするための会」は、2008年度より日本医師会の事業の一環として行うこととなった。

北海道医師会では、本事業を支援するため、当会ならびに札幌市・旭川市両医師会が共催となり北海道大学・札幌医科大学・旭川医科大学の医師会の後援を得て、「女性医師のキャリアを継続するために」をテーマに「医学生・医師による医療を考える合同懇談会」2006年12月8日（金）に開催した。参加者は33名。

次 第

1. 開 会 総合司会 藤井 美穂
2. 挨拶 北海道医師会会長 飯塚 弘志
3. パネルディスカッション
パネリスト
「地域医療をどう守るか
ー連携と役割分担の視点からー」
加藤 紘之 先生(斗南病院 院長)
「性差医療の切り口から女性医師の勤務を考える」
天野 恵子 先生
(千葉県立衛生研究所所長/千葉県立病院副院長)
「女子医大生と現役女性医師の意識差」
斉藤 康子 先生(婦人科・心療内科医師)
「キャリア継続の実例 ー女性外科医師としてー」
矢嶋 彰子 先生(外科医師)
4. 懇 談
5. 閉 会

以後、三大学の開催に協力し、当会においては次のとおり開催している。

■ サポートの会開催状況

開催日	内容・主なテーマ	参加者
2012.11.16	崩壊している地域医療の現状 ～もしも自分が厚生労働大臣 なら、北海道知事なら…	37名
2013.11.22	女性医師も男性医師も輝いて 生きるために	19名
2014.02.20	誇りを持って仕事と生活を楽 しむために必要なこと	18名



医学生・研修医と語る会(2014年2月20日)

開催日	内容・主なテーマ	参加者
2014.11.13	家庭における2人の協働～男女ともに輝いて働くために	27名
2015.03.04	時勢に適応した病院を考える	18名
2015.10.10	「地域における観光と医療に関する北海道・台湾コンファレンスin北見」のセッション「地域と医療」の一部として開催	20名
2016.02.29	Women physicians in Europe : career-family balance	22名
2016.06.04	北海道の地域医療を考える若手医師ワーキンググループとして開催	24名
2016.07.24	専門医制度を学び、これからのキャリアを考える	28名
2017.02.26	医師のキャリアって何だろう？医師にはどんな働き方がありますか？	34名
2017.09.03	働き方改革の背景とディセント・ワーク	33名
2018.02.25	臨床医として進化し続けるために～医師のキャリアデザインとイクボス～	50名
2018.10.28	私のキャリアパス～connecting the DOTS～	45名
2019.03.21	これからのキャリアを考える「国境なき自由人救急医ナカジー何故ここに」	54名



本事業は、当会では2016年からは「医学生・若手医師キャリアデザインセミナー」として開催している。(60ページ再掲)

(3) 女性医師の勤務環境の整備についての啓発活動

日本医師会では、女性医師の勤務環境の整備に向けた広報支援活動として、病院長、病院開設者・管理者を対象に都道府県医師会と共催で「女性医師の勤務環境の整備に関する病院長、病院開設者、病院管理者等への講習会」を2006年度から開始した。

本事業は、女性医師がキャリアを中断することなく就業を継続するためには、病院長をはじめ上司・同僚の理解が不可欠であることから、女性医師に関する就業上の問題点を明らかにし、子育て等、女性医師支援の理解を深めることを目的としている。

北海道医師会では、女性医師が出産や育児によりキャリアを中断することなくライフステージに応じて働くことのできる環境づくりのため、「女性医師を職場で活かすために」をテーマに2007年12月9日(日)に開催した。参加者は61名。

次 第

1. 開 会 司会 藤井 美穂
2. 挨拶 北海道医師会会長 長瀬 清
3. 講 演
 - 座長 北海道医師会副会長 畑 俊一
 - 「何故 今、女性医師…なのか？」
 - 日本の医療の崩壊をくい止めるために—
 - 講師 日本医師会男女共同参画委員会
委員長 保坂 シゲリ 先生
 - 「働きやすい病院づくり」
 - 子育て支援を中心として—
 - 講師 大阪厚生年金病院院長
清野 佳紀 先生
4. 意見交換
5. 閉 会

以後、次のとおり開催している。

■ 講習会開催状況

開催日	内容・主なテーマ	参加者
2008.11.4	働きやすい職場づくりー女性 医師支援から勤務医のワーク ライフバランスへー	34名
2014.03.01	明日の医療は貴女が創る/ 北海道内の病院の取り組みに ついて	47名
2014.09.06	明日の医療は貴女が創る/ 北海道内の病院の取り組みに ついて	36名
2015.05.09	女性も男性も輝く、日本の明日 を迎えるために/北海道内 の病院の取り組みについて	40名

日本医師会では、本事業を2008年度までの3年間でほぼすべての都道府県医師会において開催することができたことや、対象となる病院長、病院開設者・管理者等の交代がそれほど頻繁ではないことを理由に2010年度以降は一旦休止としたが、当会では、北海道医療勤務環境改善支援センターとの共催で引き続き独自の育ボスセミナーとして開催を継続した。(46ページ参照)

その後、日本医師会においても法律や制度面での変化や病院長等、対象者の交代が進んだことなどを受け2013年度より再開された。

(4) 日医コーディネーター 養成講習会

2007年12月1日(土)日本医師会館にて、女性医師バンク事業の中核を担うコーディネーターの増員を可能にするため、また、広くコーディネート業務の詳細を周知し、各地で展開しているドクターバンク事業に活用してもらうことを目的に講習会を開催した。参加者は、ドクターバンクのコーディネート業務に関心を持ち、かつ都道府県医師会の推薦を受けた会員医師であり、北海道医師会からは北野・藤井両常任理事が出席、37都道府県49名の参加があった。講習会の内容は、「女性医師バンクの現状」、「職業紹介事業の留意点」、「労働法制について」、「保育システムの状況」、「医師の仕事の種類」、「コーディネートの際の留意点および今後のバンク事業」について現職のコーディネーターから説明があった。

(5) 女性の働きやすい病院評価 認定病院視察 (大阪厚生年金病院)

北海道医師会では、医師不足により地域医療が崩壊しつつある中で総医師数に占める女性の割合が上昇しており、女性医師が働きやすい環境の整備は重要な課題であることから、本道においてモデルとなる病院を立ち上げるため、女性医師の働きやすい環境整備に先駆的な取り組みをしている大阪厚生年金病院の視察を2008年5月27日(火)に行った。

清野病院長から同病院が取り組んでいる女性医師の支援策等を中心に資料に基づき説明がなされ、意見交換を行った。引き続き、産婦人科、小児科外来や病児保育室等(ペンギン)を見学した。

(6) 日医保育システム相談員講習会

日本医師会では、女性医師の支援には欠かせない保育について、さまざまな保育サービスを効率的に利用するための情報を把握し、医師の保育についての相談に応えられる人材の養成・普及を目的に2008年11月19日に日本医師会館において講習会が開催された。当日は、院内保育所に関するアンケート調査結果の報告や保育システム相談員の説明、設置の提案、全国6地域の保育サービスの現状調査結果の発表と厚生労働省より女性医師確保対策にかかわる取り組みについて説明があった。北海道医師会からは北野・藤井両常任理事が出席、全体の参加者は、各都道府県医師会等の役職員115名であった。

(7) 女性医師等相談事業連絡協議会

2009年度より「女性医師等復職研修・相談事業」として、国において予算化され一部の都道府県では具体的な取り組みが開始されたことにより、今後の普及を目的に、先行実施の都道府県医師会からの事例発表を中心に情報交換を行うため、2009年9月30日に日本医師会で協議会が開催された。北海道医師会からは藤井常任理事が出席、各地からの参加者は118名であった。当日は、青森県、岩手県、秋田県、茨城県、徳島県、山口県、宮崎県の7医師会より事例発表が行われた。

(8) 日医女性医師支援センター事業 ブロック別会議

女性医師バンクを含む本事業を、今後も継続発展させていくためには各地において地域からの声をきくと同時に、日本医師会の女性医師支援センター事業を理解する双方向による情報の伝達の機会を設けることも必要であることから、2009年度より各地医師会の協力を得て開催している。

北海道医師会は、「北海道・東北ブロック会議」に参加し、本会の取り組みを報告するとともに、他県の取り組み発表を窓口事業の参考にした。

■ ブロック別会議開催状況

開催日	フリートークテーマ	担当
2010.02.28	ドクターバンク、講演会等での託児サービス、育児支援、休職中の女性医の情報把握、非会員の女性医への情報伝達、女性医同士の情報ネットワーク、女性医からの相談内容、行政との協力関係、病院管理者の女性医に関する理解度	岩手県
2011.01.30	大学での男女共同参画に関する教育、相談窓口事業体制の整備、産休・育休制度等の情報提供、医師を目指す高校生のためのセミナー	青森県
2011.12.11	相談窓口事業の相談件数、託児サービス併設費用助成、女子医学生卒後の定着、研修病院訪問事業、転勤先の県での支援、院内病児保育	宮城県
2012.12.09	研修医をサポートするための会、女性医師支援セミナー、臨床研修指定病院訪問事業、女子医学生との懇談、産休・育休制度等の情報提供、医学部を目指す中高生対象の事業、初期研修終了後の県内定着方法	青森県
2013.09.21	復職研修事業、勤務医問題と重複する女性医師問題、医師の勤務環境、若手医師の意識の変化、相談窓口利用者との意見交換、医学部での男女共同参画関係の講義	北海道

開催日	フリートークテーマ	担当
2014.10.09	2020.30推進懇話会参加者の公募、育児サポート事業、若手医師の医師会加入促進活動、相談窓口の相談件数、日医女性医師バンクと各県との連携	山形県
2015.11.21	2020.30実現をめざす地区懇談会、当直明けの勤務、勤務環境改善研修会での産業医単位の取得	福島県
2016.09.24	医療人イクボス宣言、若手医師のキャリアサポートセミナー、医師夫婦双方の上司へのアプローチ、育児サポートにおける子どもの視点	秋田県
2017.12.03	女性医師のモチベーション、子育て世帯への支援	岩手県
2018.10.20	日医女性医師バンクと地域医師会の連携、育休取得に必要な勤務期間、休職後のモチベーション	宮城県

■ 意見交換での主な内容

- 青森県医師会が実施している研修病院訪問を参考に、各道県が事業を開始。
- 女性医師問題で集約されるのは出産・育児など子育てへの支援であり、その年齢層はほとんどが勤務医であることから、男女関係なく勤務医の問題としてとらえていくことが必要。
- 北海道医師会では、医師会費が負担となっている若手医師に、医師会活動参加促進のための会員限定の育児サポートを開始。育児サポート事業の助成金は、会費を相殺できる金額で設定。
- 男性も女性も働きやすい勤務環境の改善と子どもたちが安心できる環境づくりを目指し、育児サポートと勤務緩和の両方を用意してどちらも選択できるようにする。

(9) 日医女性医師支援センター・シンポジウム

女性医師のさらなる活躍のため、女性医師支援の今後の方向性や具体策を考えるとともに、本事業の円滑な運営と推進に役立てることを目的に、2009年5月30日(土)にシンポジウムが開催された。当日は、全国各地から248名が参加し、厚生労働省医政局長による基調講演、全国女性勤務医に対するアンケート調査結果報告、6人のシンポジストによる講演に続き、会場の参加者を交えた総合討論が行われた。総合討論ではフロアから臨床研修中の妊娠・出産・育児により研修が困難になるケースが報告された。

なお、この件については、後日、日医会長名で厚生労働大臣宛に、臨床研修期間中の妊娠・出産・育児への配慮についての要望書を提出した。その結果、2009年6月30日付で厚生労働省から「臨床研修を長期にわたって休止する場合の取扱いについて」の事務連絡が作成され、臨床研修病院や臨床研修医に現行ルールの周知が図られることとなった。

(10) 男女共同参画やワークライフバランスについての講義の医学部教育カリキュラムへの導入促進

女性医師が生涯を通じてキャリアを継続するためには、男女共に医学生の時期から男女共同参画やワークライフバランスについて明確に理解しておくことが必要であることから、日本医師会では、文部科学省において検討中のモデル・コア・カリキュラム改訂に当たって、文部科学省政務三役ならびに「モデル・コア・カリキュラムの改訂に関する連絡調整委員会」に対し、それらの講義導入の要望書を2010年度に提出し、促進のための働きかけを行った。

(11) 北海道医師会ホームページに女性医師支援コーナーを設置

潜在女性医師の発掘や就業を促進するため、女性医師と医療機関との情報交換の場としてインターネットのホームページを使って提供するシステムを、北海道医師会のホームページで2010年4月から公開した。

(12) 北海道医師会男女共同参画検討会

北海道医師会では、女性医師の働きやすい環境整備にはどのような施策が必要かを検討するとともに、女性医師のみならず男性医師も含めた医師全体の就労環境改善について協議することを目的に、2010年度から1年間のプロジェクト委員会として設置し、2010年10月5日(火)と12月21日(火)ならびに2011年2月28日(月)の3回委員会を開催し、女性医師等勤務環境整備事業など種々協議を行った。

各委員から出された貴重な意見を参考に、2011年6月15日より相談事業や育児サポート事業を主な業務とする女性医師等支援相談窓口をスタートさせた。なお、本検討会は、相談窓口の充実を図ることに専念することとし解散した。

3 2011年から

(1) 北海道医師会女性医師等支援相談窓口開設

2011年度第1回医療関連事業部担当理事会において、6月15日開設を目指し、まずは保育サポートに重点を置き、室蘭・苫小牧・北見・帯広地区のコーディネーターを地元医師会から推薦していただき、開設準備を進めていくこととした。

第5回三役会〔2011.5.23〕において、今年度の基本的活動方針において医療関連事業部の事業項目に掲げた「女性医師等支援相談窓口の設置の検討」に関して、相談窓口の「事業内容」「携わるコーディネーター」「事前告知の方法とポスター（チラシ）」などについて説明し、了承された。

なお、育児サポート事業の実施に当たっては、保育支援事業者と子どもの扱いをめぐるトラブルになるケースなどが想定されるので、「保育支援事業者」「保護者」「北海道医師会」の三者が事前に十分な打合せを行い、このシステムに関する理解を深め、トラブルにならないように配慮するなど慎重に対応することとなった。

続いて、第4回常任理事会〔2011.5.24〕において、「第15号 女性医師等支援相談窓口の開設に関する件」を藤井常任理事から上程し、女性医師等就労支援事業の一環として、育児や介護と仕事を両立させる上での問題や、長期間休職してしまった方の復職など医師が抱えるさまざまな悩みについて対応すべく「相談窓口」を6月15日から開設することが決定された。第2回理事会〔2011.5.28〕においても同様に承認を得た。



相談窓口事業については、次の章で詳しく紹介する。

北海道医師会
女性医師等支援相談窓口
周知チラシ

(2) 女性医師のキャリア支援のためのDVD作成

日本医師会では、女性医師のキャリア形成やライフスタイルのあり方を多くの女子医学生、研修医や若手の女性医師に伝えることを目的として、ロールモデルとなる女性医師の働き方や女性医師支援に携わるさまざまな立場の方々の考え方、取り組みを紹介するDVDを2011年度に作成し、都道府県医師会等に配布した。

(3) 日本医師会理事の女性医師枠の創設を要望

日医男女共同参画委員会では、日本医師会長に対し2011年2月ならびに2013年6月に要望書を提出した。その結果、2014年から理事に女性枠と勤務医枠が創設された。当会からは、藤井美穂常任理事が委員会委員に参画していた。

(4) 「2020.30」推進懇話会

2010年12月、第3次男女共同参画基本計画が閣議決定された。この中で「社会のあらゆる分野において2020年までに指導的地位に女性が占める割合が、少なくとも30%程度になるよう期待する」との目標が改めて明記され、それに伴う数値目標の設定を推進する方針が示された。それに合わせ、日本医師会では、次のとおり「女性一割運動」について数値目標を定めた。

1. 2012年度までに、委員会委員に女性を最低1名登用！女性一割に！
2. 2014年度までに、理事・監事に女性を最低1名、常任理事に女性を最低1名登用1役員の女性の割合を一割に！

この数値目標を達成するために、女性医師会員に日医師会の組織・運営・活動にかかわる理解を深め、将来日本医師会の活動に参加していただくことを目的として「2020.30」推進懇話会を2012年1月27日（金）に開催した。参加者は都道府県医師会等より推薦を受けた女性会員85人であった。

北海道医師会からは、旭川市医師会理事の坂田葉

子先生を推薦した。翌年からは、北海道医師会では、50歳以下で医師会活動に興味があり、将来その活動に自ら参加する可能性を考えている女性会員を公募して推薦することとした。

(5) 日医「2020.30」推進懇話会 北海道出席者連絡会

日本医師会が2011年度から将来日本医師会の活動に参加していただくことを目的として開催している「2020.30」推進懇話会に、北海道医師会として推薦している出席者相互の交流ならびに情報の共有を目的に、出席者連絡会を2015年2月21日(土)に開催した。

次 第

1. 開 会
2. 挨 拶
3. 出席者紹介
4. 話題提供
 - (1) 「医師会って、なに？」
 - (2) 北海道医師会のススメ「医師会の？に答え、医師会の！をご案内」
5. 意見交換
6. 閉 会

引き続き、2015年8月8日(土)に第2回を開催した。

(6) 2020.30実現をめざす地区懇談会

「2020.30」推進懇話会は、多くの女性医師に日医の活動内容を知っていただき、医師会活動への参画を促しつつある。しかしながら、全国各地より日医に参集いただくかたちに限界もあることから、2014年度からは「2020.30実現をめざす地区懇談会」として、全国の熱意ある女性医師が核となり、各地において少人数による「2020.30」実現に向けた意見交換会を開催していただくこととした。

北海道医師会では、日本医師会「2020.30」推進懇話会の活動をさらに推進するため、各地でディスカッションをすること、本活動に参画する方々との連携を深める機会として活用することを目的に日医女性医師支援センターの主催で2015年8月に開催した。

次 第

1. 開 会
2. 挨 拶
3. 懇 談
 - (1) 日医「2020.30」推進懇話会 北海道出席者連絡会について
 - (2) 2020.30実現をめざす地区懇談会について
4. 閉 会

引き続き、2017年3月29日(水)に第2回を開催した。

(7) 医学生との座談会

本事業は、当初は北海道医師会女性医師等支援相談窓口事業の一環として、相談窓口事業を推進していくためには、医学生や研修医の意見を反映していくことが重要であることから、医師として働き続けることに対する意識や、そのために必要な環境整備などに関する意見を把握するため、「医師のキャリアアップと人生設計」をテーマとして、2012年7月30日(月)に開催した。当日は、北大、札幌医大、旭川医大と国際医学生連盟(IFMSA-Japan)の学生男女各4名と、子育て中の医師夫妻が参加。医学生に将来への期待や不安などを伺った。座談会の内容は、北海道医報附録にて報告した。

引き続き、2013年7月31日(水)に第2回目を開催し、以後は、医学生が主体となり企画・運営する「医学生・若手医師キャリアデザインセミナー」として開催している。

医学生への取り組みは、別の章で詳しく紹介する。(58～65ページの再掲)

(8) 日医女性医師支援事業 連絡協議会

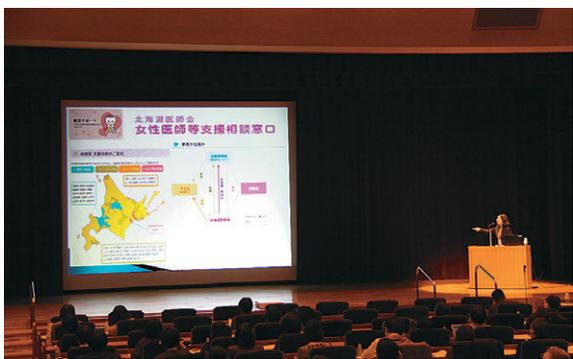
全国の全6ブロックで開催された「女性医師支援センター事業ブロック別会議」の議事内容を踏まえ、各ブロックで報告された各地の特徴的・先進的な取り組みを紹介し、全国で情報を共有することを目的に2011年度より日本医師会において開催している。



女性医師支援事業連絡協議会 (2016年2月26日)

(9) 日医大学医学部・医学会 女性医師支援担当者連絡会

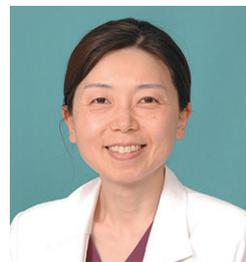
2013年度に全国の大学医学部の女性医師支援や男女共同参画の担当者を対象とし日医の取り組みの周知と各大学医学部の取り組みについての情報交換を目的とした「大学医学部女性医師支援担当者連絡会」を開催した。2014年度は、新たに各医学会において女性医師支援や男女共同参画に取り組んでいる方々にも参集いただき、名称も「大学医学部・医学会女性医師支援担当者連絡会」として、さらなる連携強化を図ることを目的に開催している。

大学医学部・医学会女性医師支援担当者連絡会
(2016年12月2日)

(10) 日医女性医師支援センター 事業との連携に関する 意見交換会

北海道医師会女性医師等支援相談窓口事業などの当会女性医師支援に関する取り組みのヒアリングと、日医女性医師支援センターとの連携についての意見交換を目的に、日本医師会女性医師支援担当役員ならびに関係者が北海道医師会を来訪し2017年3月31日(金)に意見交換を行った。

「2020.30」推進懇話会参加者 公募に応募して

北海道医師会勤務医部会
若手医師専門委員会 委員
医療法人溪和会 江別病院
佐々木 彩実 先生

北海道医師会から、「2020.30」推進懇話会へ参加しませんかという主旨の封書が届いたのは、確か2015年で、第3子を妊娠中のことでした。現在の病院に勤めてから、病院の方針で郡市医師会ならびに北海道医師会へ加入したものの、医師会会誌や郡市医師会の会報に目を通すくらいで医師会活動がどのようなものか興味を持つこともなく、正確に言えば大学院卒業後で日々の診療のことを考えるのに精一杯でした。

そんな中で前述のお誘いがあり、何故だろうと思いつつもせつかくの機会だから何でもやってみよう、また上司に相談したところやってみたらいいんじゃないという返事をもらい、日本医師会の会議に参加することとなりました。

実際に会議に参加し、各地の女性医師の意見を聞きながら、女性が役職につくにあたっての問題や、子育て中の就労にかかわる問題について議論を行い、今後どのように支援ができるか考えるようになり、同時に自身が妊娠、出産を経て仕事が続けられている状況を見て人や制度を含めて自分の周囲にあるような環境があると良いのかと漠然と考えてみたりしていました。

ただその時は考えを巡らせるだけで実際何らかの行動を起こす所までには至りませんでした。

その後北海道医師会の若手医師専門委員会委員へ推薦を頂き、現在も医師会活動を行っております。

癌診療医として日々思っている検診の受診率向上や、疾病の予防も含めた患者さんへの教育、また医療を提供する私たちの健康の確保など、一勤務医として意見を発信できればと考えております。



医学生との座談会

〈第1回採録〉

会 期：2012年7月30日(月)

会 場：JRタワーホテル日航札幌

テーマ：医師のキャリアアップと人生設計

北海道医師会女性医師等支援相談窓口事業の推進策として、初めて開催した「医学生との座談会」には、北海道大学、札幌医科大学、旭川医科大学の学生8名、子育て中の医師代表2名、北海道医師会から長瀬会長、相談窓口コーディネーターら4名、北海道の地域医師確保推進室から1名が参加した。

「医師のキャリアアップと人生設計」をテーマに、思い描く医師像、将来のライフプラン、地域医療の印象などについて、医学生が率直な意見を述べ、医師夫妻からは子育ての体験談や要望するサポート体制などについて提言があった。主な発言内容を抜粋し、採録する。

思い描く医師像

房田 卓也さん(当時・北海道大学5年)

小学生の頃からアレルギー性鼻炎の治療で通っている開業医の先生が、自分の中で思い描く医師像としてあります。患者ときちんとコミュニケーションを取り、状態が変化したら薬を変え、(鼻炎以外の)かぜなども診てもらいました。今で言う、プライマリ・ケアに近いでしょうか。

潮田 亮平さん(当時・旭川医科大学2年)

高校時代に地元の北見赤十字病院の内科医が一斉退職して、医療が危ないと話題になりました。調べていくと自分が生まれ育ったオホーツク地域をはじめ北海道には医師が足りていないことを知り、誰かがなるのを待つのではなく、自分が医師になろうと思いました。地域医療、へき地医療を志して大学に入り、どんなふう患者さんと向き合う医師になりたいのか、自問自答しながら学生生活を送っています。

将来のライフプラン

佐藤 彩さん(当時・北海道大学4年)
IFMSA-Japan SCORA (国際医学生連盟性と生殖・AIDSに関する委員会)
北海道地域責任者

祖母は小さな病院の小児科医をしながら、3人の子どもを育てました。大学には「子どもが何人もいるけれど、教授や臨床医をやっています」という先生方もいて、(仕事と子育ての両立は)特に心配していません。お手伝いさんに子育てを任せていた祖母のモデルから学ぶことは、どこまで自分の力で子育てをできるかです。

和田 莉奈さん(当時・北海道大学4年)

私は医師として働き続けながら、家庭を持って自分の力で子育てしたい思いがあります。旦那さんの理解と協力は必要だろうし、産休・育休が取れるのか、退職後職場にスムーズに戻れるのか、仕事と家庭のどちらかをおろそかにしなければならない状況になるのかなどの不安はあります。

申間 孝朗さん(当時・札幌医科大学5年)

学生の時に出産を経験している知り合いがいて、お母さんや親戚に協力してもらって、子育てしているのが現実です。自分は地域枠特別推薦で大学に入ったので、卒後9年は道の指定する病院で働くことが義務付けられています。勤務地が変わるごとに、その時お付き合いしている女性がついてきてくれるかどうか心配です。

渋谷 仁美さん(当時・札幌医科大学5年)

医師の養成には莫大な公費(税金)が使われていて、私たちのいる公立大学は特にそうです。その分を社会に返さなければと思っているので、結婚や子育ては大事ですけど、自分のライフプランを言っている場合ではないというのが、私の正しい思いです。

地域医療の印象

鈴木 美紗さん(当時・旭川医科大学4年)

地域医療の現場には、魅力的な先生がたくさんいらっしゃいます。名寄の実習先でお会いした消化器内科の先生は、「それぞれの地方に特色があり、地方でやるからこそ、見えることがあるのだよ」とおっしゃられたことが印象的でした。在学中に地域を見た学生とそうでない学生には、温度差があるのかなと感じます。

山本 祥太さん(当時・北海道大学5年)

IFMSA-Japan(国際医学生連盟)代表

へき地で働くには、その土地に愛着がないと務まらないのではと思います。だからこそ、時間のある学生のうちに、道内のいろいろなへき地の病院に行って、働いている先生や患者さんの様子を見て、ここなら働いてもいいという意識や、地域医療という選択肢を持たせることが大事ではないかと思っています。

子育ての体験談

足立 英文医師

(当時・札幌医科大学附属病院勤務)

2年前に子どもが生まれ、北見の病院に異動になりました。夫婦で同じ病院の同じ診療科に勤務していたので便宜を図りやすく、病院の託児所が夜遅くまで子どもを見てくれたこともあります。分娩数と医師数の兼ね合いから、さほど多忙ではなかったことが、(仕事と子育てを両立できた)一番大きな要因です。

今春札幌に戻り、子どもがいて、夫婦の勤務先病院が違うのは初めての状況ですが、今の条件ならうまくやっていけそうに思います。

足立 清香医師

(当時・札幌社会保険総合病院勤務)

夫は月の半分は出張と当直でいない状況で、その際の呼び出しや当番時は、札幌の実家の両親に(子どもの世話を)助けてもらって、生活が成り立っています。子育てのサポート体制としては、やはり院内託児所があるといいです。北見の病院には病児保育のシステムがなく、具合が悪くなった子どもは帰宅しなければならなかったので、(多くの病院などで)病児保育の体制を整えていただきたいと思っています。

医学生との座談会

〈第2回採録〉

会 期：2013年7月31日(水)

会 場：JRタワーホテル日航札幌

テーマ：医師のキャリアアップと人生設計

前年に引き続き、医学生との意見交換を通じ、医師として働き続けることへの意識や、そのために必要な環境整備などの情報を把握し、北海道医師会女性医師等支援相談窓口事業推進の参考とする「医学生との座談会」を開催した。

北海道大学、札幌医科大学、旭川医科大学の学生7名、北海道医師会から7名、北海道地域医師確保推進室から1名が参加し、相談窓口コーディネーターが進行役となり、キャリアアップ、北海道の地域医療、将来のライフプランについて意見を聞いた。主な発言内容を抜粋し、採録する。

キャリアアップについて

高橋 有毅さん(当時・札幌医科大学5年)

自分は北海道の医療に身を捧げようと思っています。北海道の医療を最前線で支え、最終的には大学の教授になって、現場の臨床だけではなく、地域医療や行政的な面でも力を尽くしたいです。地域医療については、自分が現場で働くというよりは、中央でうまくやりくりする側の仕事に興味があります。



吉崎 那保さん(当時・札幌医科大学5年)

私は地域枠で入学しており、(卒業生の)前例がないため、具体的な医師像を描けずにいます。(結婚・出産・子育てなどの)女性としてのライフイベントが、(医師のキャリアアップに)どのようにかかわってくるのか読めないことも要因にあります。田舎出身なので、専門医取得などの信頼される知識を身に付けた上で、地域で医師をやっていたらとの思いはあります。女性医師は3分の1が生涯独身と聞いていますし、ライフイベントのことを考えると悲しい気持ちになります。

小野寺 慧洲さん(当時・北海道大学4年)

将来は具体的に定まっていませんが、臨床職と研究職の両方をやりたいと思っています。まず初期研修で救急全般における臨床の厳しさを知り、その後、研究職に行くキャリアプランを描いています。海外に留学し、何らかの研究を深めたい希望もあります。研究職の先には自ずと教授の道があり、教育というものに向き合っていかなければならないので、臨床と研究の双方とかかわっていきたくと思っています。

北海道の地域医療について

村田 雄基さん(当時・旭川医科大学4年)

僕自身そうですが、地域医療をポジティブな面にとらえている人たちの意見に挙がるのが、患者さんとの距離の近さです。コミュニケーションが都市部に比べて濃密というのは、名寄と紋別に地域医療の実習に行った時にも実感しました。また、都市部より感じるのは、患者さんを診るというより、地域を診る、という役割です。人口3,000~4,000人規模の町では、地域の結び付きが強く、住民の皆さんがマチのお医者さんのことをよく知っていて、地域医療を長く続けている医師はスーパーマン的な印象を受けました。マイナス面を言うなら、それを続けるのは難しいですし、一番大変なのではないかと思っています。

仙 万梨子さん(当時・北海道大学4年)

私はずっと札幌に住んでいて、新しい土地で知り合いもない地方へ行くには、ある程度勇気がいるなどと思います。以前報道番組で、後期研修医が一人で離島医療を行う様子を見て、スパンが短いため引き継ぎも十分ではなく、大変そうでした。また、地域医療は臨床が主となり、研究をしたい人はなかなか行きたがらないのではと思います。地方でもできる研究活動など、具体的な道を示していただけたら、イメージも変わってくるのではないのでしょうか。

将来のライフプランについて

宮内 琴菜さん(当時・旭川医科大学4年)

小さいころ思い描いた理想の家庭像と、医師として働きながらの家庭像には、すごく乖離があると思いますか…。地域枠で入学しているので、卒後9年間は指定された病院で働くことになります。(その間に結婚・出産したら)医師の仕事と家庭、旦那さんの仕事、子どもの教育を両立できるのか、不安だらけです。自分のやりたいことが明確に見えていないので、出産時や育児期の支援の要望なども主張しづらいです。

野村 朝子さん(当時・北海道大学3年)

IFMSA-Japan SCORE (国際医学生連盟
基礎研究留学に関する委員会) 責任者

仕事をしていく上で、出産や子育てをためらわずにできるような環境であってほしいと私も思います。他職種の方々を含め、周りのサポートがなく、自分の仕事を辞めるか、子どもをつくることをあきらめるかの選択を迫られる方がたくさんいらっしゃると思います。これは医師のキャリア継続に限らず、社会全体として見ていく課題と思いました。

4

各種育児サポート事業の実施

(1) 託児サービス併設費用助成の開始

北海道医師会では、育児中の女性医師などに対し、学習する機会を確保することにより、勤務継続や復職支援を行うことを目的に、全道規模の専門医学会等が主催・後援する会議や研修会などにおいて託児サービスを2010年度より開始した。

併設した場合の費用として2万円を上限に助成を開始した。

■助成状況

年度	件数	年度	件数
2010	1	2015	5
2011	2	2016	6
2012	4	2017	9
2013	6	2018	11
2014	5		

(2) 医師会主催の研修会等への託児サービス併設費用補助

日本医師会が行う研修会等では、2007年度より子育て中の医師が参加しやすくするため託児室を併設している。各医師会にも同様の措置をお願いしていることから、育児中の女性医師の学習機会確保を目的として、研修会等への託児サービス併設費用に対し、一定額の補助を2009年度より開始した。

(3) 講演会・研修会等における託児室併設についての要望

子育て中の医師が研修を受けやすい体制を構築することは、医療の質を確保し医師のキャリア継続のためにも非常に重要であることから、製薬会社などが医師を対象として行う研修会等において託児室を併設するよう、2013年と2014年に北海道医薬品卸売業協会ならびに医療用医薬品製造販売業公正取引協議会北海道支部に対して要望書を提出した。

さらに、毎年1月に北海道の医薬品メーカーなどが集う「北海道薬業界賀詞交換会」の席上において、北海道医師会長から新年の挨拶の中で依頼を続けている。



北海道医師会長より、北海道薬業界賀詞交換会にて研修会の託児室併設を要望(2015年1月6日)

(4) 育児サービス費用助成の開始

子育て中の医師の仕事と家庭を両立するためのサポートを行うため、育児サービスの費用を一部医師会が負担する事業を、2014年9月1日より開始した。

対象は、0歳から12歳までの子どもを育てる医師会の会員（生計を同じくしている者が就労していることが条件）とし、支援事業者と医師会の3者面談の上、事前登録を行う。

支援内容は、子どもの急な発病で保育園に預けられない等、病児・病後児の預かり、緊急を要する子どもの預かり、急な出張などによる宿泊の預かりを行い、その利用料の一部を負担する。助成の上限は年間3万円で、期間内1世帯1回限りとする。

■助成状況

年度	育児サポート登録者数	助成件数	年度	育児サポート登録者数	助成件数
2014	11	18	2017	33	11
2015	23	6	2018	38	12
2016	26	15			

各種アンケート調査の実施

(1) 女性医師の仕事と家庭の両立にかかわるアンケート

日本医師会医師福祉対策委員会答申書「医師福祉事業の現状と将来について」(2000年3月)の中の「女性医師の増加と今後の対応策」について、積極的に取り組むべきであるとの会員からの提言を踏まえ、北海道医師会医業経営・福利厚生部では、女性医師の仕事と家庭生活の両立による負担の実態および意識など現状を把握するため、2000年10月11日から25日の期間、当会に所属する女性会員639名(開業会員148名、勤務医会員491名)を対象に調査を実施した。その結果、開業医会員が57.34%、勤務医会員は32.8%の回答を得た。

(2) 職場における女性勤務医師の実態調査

北海道医師会医療関連事業部では、女性医師の割合が増加している中で、結婚・出産・育児を理由にやむなく離職・休職していることが医師不足の一つの要因ともなっているため、医療機関は女性医師に対してどのような環境を整備し、どのような支援策を講じているか等を把握するため、2008年12月下旬～1カ月間、道内全病院の616病院、335診療所、医育三大学126教室、計1,077カ所の医療機関等管理者を対象に実施した。

(3) 女性医師の働く環境整備に関するアンケート

北海道医師会医療関連事業部では、医師不足の一つの要因ともなっている結婚・出産・育児を理由にやむなく離職・休職している女性医師に対して、医療機関はどのような環境を整備し、どのような支援策を講じているか等を把握するため、2009年5月下旬～1カ月間、道内全病院の管理者を対象に調査を実施した。

その結果、354病院(回答率60%)の回答を得た。

(4) 医師の就労環境等に関する調査

医師の就労環境や過重労働が問題となっている背景から、開業医を含めた医師全体の実態を把握するため、2010年8月7日開催の北海道医師会勤務医部会運営委員会小委員会において設問内容を検討し、9月、全会員[開業医(A会員)2,573名、勤務医(B1、B2、C1～3会員)5,776名]を対象に調査を実施した。

その結果、開業医1,110名、勤務医1,541名からの回答を得、回答率はそれぞれ43.1%、26.7%であった。

(5) 女性医師の勤務環境の現況に関する調査

日本医師会では、今後の女性医師支援策をより実効のあるものとするため、病院に勤務する女性医師の勤務環境の現況を詳細かつ正確に把握し、検討のための基礎資料を得ることを目的として、「女性医師の勤務環境の現況に関する調査」を2008年11月下旬より実施した。調査は全国の病院約8,900施設に依頼し、その病院に勤務する女性医師に対し調査票を配布する方法で行い、7,467件の回答があった。集計結果の解析は、男女共同参画委員会が担当した。

(6) 女性医師支援に関するアンケート調査 (大学医学部、学会対象)

日本医師会では、今後の女性医師支援のための各施策を、より実効あるものとするため、女性医師支援の取り組みについてのアンケート調査を各大学医学部(全80大学)ならびに日本医学会分科会(全118学会・2014年1月現在)を対象に実施した。調査は、2014年1月～2月に実施し、回収率は大学医学部が81.25%(65大学)、学会が86.44%(102学会)であった。